

歴史回廊

第12部・近世の自然と暮らし⑥

今回は、奥海田村絵図から江戸時代の林野の姿を見たのであるが、別の資料でも確かめてみる。

広島藩では、享保十(一七二五)年に村ごとの林野台帳(山帳)を作成させた。奥海田村にも幸いそれが残されている。山帳には、すべて一筆(一カ所)ずつ縦、横の長さや樹種なども記載されており、これらを整理すると次のようである。

■村絵図に結果一致

藩の所有になる御建山おたてやまの面積は約一割で、立ち木は松が中心。村共有の野山は八割強でいずれも柴草山や草山。腰林は一割弱だが、実に三百五十一カ所に細かく分割され、

8割が柴草山・草山

山帳から探る林野

村民個別の所持である。

その腰林には松、雑木を中心に、時に栗や榿かしが交じる。幹回りが最大でも一・五尺(約四十五センチ)や一尺にとどまる腰林が、面積にして七割。それ以下の小松などが一割五分で、立派な樹木はめったに存在しない。村絵図に一致する結果である。

今から三十年近く前、「山に勝手に入られたらどうするのですか」と地元の方に尋ねると、「昔は人が入ったら下から全部見えた」と大笑いされた。現状は写真のようによく茂っているが、昔はそれほど樹木が少なかったのである。

■島々と内陸地域差

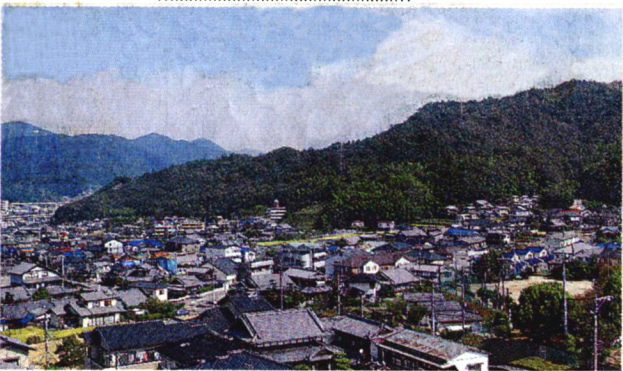
面積など正確とは言い難い面もあるが、この山帳によって、林野の姿を広く調べる道が開けた。

安芸、賀茂、豊田など沿海諸郡の山帳を調べたところ、海辺や島々と、やや内陸とでは、林野の種類や植生に大きな地域差がある。

内陸の水田中心の農村では、野山(柴草山がほとんど)の面積が平均して七、八割を占める。昔の田畑の肥料は、山で刈り取った草肥が主力であり、しばしば激しい山争いも起こった。これは何も広島だけの特徴ではない。水本邦彦氏の「草山の語る近世」(山川出版社)を参照されたい。

一方、島々では林野全体の面積が小さいうえ、野山より腰林のほうが広くなっている。これはいったい何を意味するのであろうか。

土曜日に掲載します



現在の奥海田村(海田町東海田地区)。山には木々が茂っている

(広島大教授・佐竹昭)